

## あ と が き

2月14日のバレンタインデー、チョコをたくさんもらったのではないでしょう。私も「義理チョコ」、「ファミチョコ」をいくつかもらいました。来年は「孫チョコ」をもらうのが夢です。女性同士の「友チョコ」というのもあるそうです。

もらったのはいいけれど、メタボが心配で自分で食べずに他人にあげた方も多いのでは？ それは大変もったいないことをしたという記事がありました。

この世で最も長生きした人物、フランス人女性のジャンヌ・カルマンさんは122歳で亡くなった。カルマンさんは赤ワインとチョコレートが大好きで、赤ワインは120歳まで、チョコレートは晩年になっても、欠かした日はなかった。赤ワインには長寿遺伝子のスイッチをオンにするレスベラトロールというポリフェノールが多く含まれているが、チョコレートもポリフェノールが豊富で、健康長寿によい作用があると言われていています。さらに、ポリフェノールは赤ワイン100ml中0.3g程度に対し、チョコレート100gには0.8g含まれているそうです。また、成人男性を対象にした実験では、チョコレート100gを食べると、カカオマスポリフェノールの一種、エピカテキンの約30%が体内に吸収され、血漿で抗酸化能力が増強すると確認されました。一方で、赤ワインやお茶ではポリフェノールが10%しか吸収されないと指摘されています。

一般的に、チョコレートは太りやすい食べ物だと思われていますが、カカオバターの主成分であるステアリン酸は吸収率が低く、低カロリーであるため、健康的な食材であり、さらにステアリン酸は、血中コレステロール値を下げ、カカオ成分には虫歯を抑制する効果まであるとのこと。

スウェーデンのカロリンスカ研究所は、チョコレートと脳卒中の危険度の関連性について、45～79歳のスウェーデン人男性3万7,103人を対象に約10年間追跡調査を行い、チョコレートの消費量が最も多かった群は、まったく消費していなかった群に比べ危険度が17%低下しており、さらにチョコレートの消費量が50g増えるごとに危険度は14%低下したと報告しています。

酸化ストレスは、人間では動脈硬化、糖尿病、がんなど多くの病気の引き金になりますが、動物実験でも酸化ストレスが抑えられ、線虫の平均寿命が延びたとの報告もあります。

以上のように、チョコが健康に効果があることが明らかになってきていますが、注意も必要です。砂糖を多く含む甘いチョコレートを食べすぎると、体重が増し、肥満症の発症や糖尿病の悪化につながるようになります。そのため、カカオ70%のビターチョコレート50gを食事の20分前にゆっくり食べる、という食べ方がオススメだそうです。食前にゆっくり摂ると、満腹中枢が刺激され、食事の量を減少させる効果があるからだそうです。

私も来年は他人にあげずにひとりで食べようかと一瞬考えましたが、みんなで一緒に食べる方が美味しいなと考え直しました。

(編集副委員長：田代 幹雄)

## あ と が き

カルメ焼きというのをご存じだろうか。地方によって名前が違うようだが、砂糖菓子の一つでいわゆる駄菓子である。お玉に砂糖と少量の水を入れ、加熱しながら溶かし、沸騰状態になったところで重曹を少量入れてグルグル混ぜる。すると加熱された重曹から炭酸ガスが発生し、溶けた砂糖が膨らむ。ちょうど膨らんだ状態で固まると、さくさくと甘い砂糖菓子の出来上がりである。昔は、祭りの出店などでも実演販売のような形で売っていた。小学生の頃、七輪に小さな鍋を乗せて一度に大量に作っていたのを見たことがある。

最近では重曹の熱分解を実験する教材として理科の教科書に記載され、実験キットも販売されているらしい。先に述べたように家庭にある材料で出来るのだが、これが実際やってみると案外難しいのだ。溶けた砂糖の温度、重曹を入れてかき混ぜる微妙なタイミングなどがあり、なかなか上手く膨らまない。細かいテクニックを記載した書籍やビデオまであるのだが、以前私がチャレンジしたときは5回に1回程度しか膨らまない。会心の作品(?)となると10回に1回位だった。それを縁日のおじさんは淡々と一度も失敗せず作るのだ。

医学は「観察と理論によってのみ正当化される」という実証主義の立場を取る。そして今や経験だけでエビデンスのない治療は不適切とされる時代になってきた。しかし診断や治療などには検証された事実だけではない勘と経験のような世界があるようだ。医学をカルメ焼きごときに喩えてはお叱りを受けそうだが、マニュアルやビデオで学習するだけでは到達できないある種の境地のようなものが存在すると思うのだ。

エビデンスやガイドライン至上主義を否定はしないが、それに微かな不快を感じつつ、性懲りも無くもう一度カルメ焼きに挑戦してみようと思う。

(編集委員長：吉賀 攝)

## あ と が き

飽食の日本にあって、最近問題になっているのが、新型栄養失調、平成栄養失調、<sup>ひんしょく</sup>貧食と呼ばれるものだ。

これは3パターン位に分けられる。間違ったメタボ対策のために下手な食事摂取制限をするうちに栄養が偏ってしまう 若者等がインスタント・冷凍食品や好物ばかり摂取して栄養が偏ってしまう 高齢者が生鮮食料品等の買い物や料理ができなくなり栄養が偏ってしまう、などである。特に、移動手段を持たない高齢者世帯、独居老人はこの3つとも該当しやすい。70歳以上で4人に1人、75歳以上で2人に1人が栄養失調であるとのデータがある。高齢者の場合、本人はメタボ対策も考え、バランスのとれた食事を摂っているつもりだが、それにもかかわらず栄養が偏っている場合も多いと言われている。特に、高齢者世帯の場合、あっさりした純粋な日本食が多く、肉や脂肪分の摂取が少なくなり、低アルブミン血症になりやすい。つまり、高齢者の場合、世のメタボ対策の考えとは反対に、むしろ肉や脂肪分の摂取が大事だと栄養学の専門家は警告している。さらに、足腰の弱った高齢者にとって毎日の買い物は一苦勞である。住まいからなんとか歩いて行ける500m以内に食品スーパーなどが無い「食の砂漠」地域が日本中、特に交通網の発達した都心部においてもかなり点在しており、買い物難民と呼ばれる人が全国で910万人と言われている。高齢者世帯は今後も増加の一途をたどるため、買い物難民は、今後ますます増え、その対策が急がれる。

3.11（東日本大震災）で大活躍したコンビニなどが政府や行政よりも素早くその対応策を実践し始めている。すなわち、専用車を導入して移動販売、宅配などを全国で展開しようとしている。これに対しては、政府や行政も推進策を早急に出して欲しい。

小生も一律のメタボ対策の指導ではなく、一人ひとりの食事摂取内容、生活内容等を十分聞き取って、栄養士と一緒にその人に最適の指導をしてあげなければと反省している。

（編集副委員長：田代 幹雄）

## あ と が き

駄菓子屋の話題は以前にも本欄で取り上げたが、今回は「納豆くじ」の話。

納豆くじは台紙に貼り付けられた甘納豆の小袋の中にくじが入っていて、当たりくじが出るとその等数によって賞品がもらえるものだ。賞品はかなり大袋の甘納豆で副賞に小さなオモチャがついていることもあった。豪華な(?)賞品もくじの台紙に貼り付けてあるので、子どもたちは射幸心を煽られてしまうのだ。しかも外れてもわずかばかりの甘納豆が食べられるのだから、当時私の好きなくじの一つだった。

ある日のことである。くじは残り四つとなっていたが、なんと一等の大袋が残っているではないか。くじは一つ10円、手持ちは20円なのであと二つ引くことが出来る。きわめて高い確率で一等賞を当てる千載一遇のチャンスである。ところが二つ引いてみるといずれもハズレ。はじめからくじの中に一等賞など入っていなかったというのが世の常識というものなのだろうが、純真な少年だった私は自らの不運を呪い、いささか傷ついてしまったのだ。大体において、福引きなどは最初から一等賞が出てしまうと面白みが薄れるので、ある程度経過してから一等賞を入れるというのは大人の常識というものだろう。

ところがその逆もある。「あなたは一等賞金 万円が当選しましたので返事を下さい」というメールを送りつけて、返事をすると受け取りには色々な手続きが必要などと言いながら結局のところ当選額よりもずっと高い別の商品を買わされてしまうというものだ。他に、店先でくじを引くと真珠や宝石が当たったと言われ、店内に入ると商品の加工賃などを請求されてしまうという手口もある。最近ではもっとずっと悪質で、商品どころか金だけ巻き上げられてしまうような「抽選詐欺」もあつたりする。

欲を出して騙される方が悪いと言えればそれまでだが、古今東西、くじとか抽選とかは人を引きつける力があるようだ。ところで本稿が印刷される頃は選挙の大勢が判明した頃だろうか。引いてみたら結局全てがハズレくじだったなんて事にならないでしようね。

(編集委員長：吉賀 攝)

## あ と が き

今回の山中教授の25年ぶりのノーベル医学生理学賞受賞は、元気がない日本にとって今年一番の大変喜ばしい出来事であり、これを契機に我々も気分転換を図りたいものである。

数年前、NHKスペシャル「“生命”の未来を変えた男～山中伸弥 iPS細胞革命～」を観た時、うらやましいくらいの端正な顔立ちで、話し方も謙虚で大変わかりやすい説明をされていた。こういう人を天才というのか。天は二物も三物も与えるのだな、こういう才能を持った人は生まれた時から大した苦勞もせず、成功する運命にあるんだなと勝手に思っていた。

ところが、これはとんでもない勘違いであることがわかった。10月20日の朝、病院に向かう途中のラジオで「You Tubeで山中教授が2年前の京都賞受賞の際に、人間万事塞翁が馬というタイトルで高校生に講演をされていたけど、すばらしかったね。」ということを知り、早速インターネットで検索して、視聴した。神戸大学医学部に入学後、ラグビーに汗を流したが、なぜか10回以上も骨折し、その度に整形外科にお世話になった。そのため整形外科医になろうとしたが、他のDrが20分で終了する手術を自分は2時間以上かかり、2年間、指導医に邪魔中と呼ばれ続け、山中と呼んでもらったことは一度もなかった。悩みに悩んだ末、臨床には向いていないと考え、基礎に転向した。米国のグラッドストーン研究所に留学したが、ここですばらしい指導者に会った。「研究者で最も重要なことは、VisionとHard Workの2点を同時に持つことだ。欧米人はVisionは得意でたくさん持っているがHard Workが苦手だ。アジア人はHard Workは得意だがVisionが苦手だ。研究を成功させるには、Vision(仮説)を設定した上でがむしゃらに働く必要がある。アジア人の君は、Hard Workは得意なはずだから、Visionを持つことに特に力を注げ。」といった指導を受けた。そこから得たものは、仮説を設定したら余計なことは考えず、とにかく身体を動かすことだった。そして、9回失敗の後に1回の成功があった。研究とはその繰り返しであり、挫折と苦勞の連続であった。特に日本に戻ってからは研究環境が整っておらず、米国では専門のネズミの世話担当係がいたが、日本では研究時間を削って自分が世話を全面的に行わなければならない、今度は山チュウと呼ばれるようになった。2年間、PAD(Post America Depression) の状態で研究もストップし、2度目の大きな挫折を味わった。しかし、挫折の後にはよいこともあるもので、奈良先端科学技術大学院大学、京都大学では優れた共同研究者と研究の場を確保することができ、これらのチームでの研究成果が今回の受賞につながった。

良いことがあったらそれは悪いことの始まりであることもあれば、悪いことは良いことの一步手前であったりするのが人生だ。若いうちは興味を持ったことには失敗を恐れず何にでもチャレンジしてみるべきだ、という内容で締めくくられた。

小生もいい年になったが、周りの人々に感謝を忘れず、まだまだいろんなことにチャレンジしてみようという気になった。

(編集副委員長：田代 幹雄)



## あ と が き

子供の頃、近所の駄菓子屋に「ニッケ紙」があった。当時、私の数少ない娯楽の駄菓子屋訪問で、これは親の指導により忌避すべき菓子の一つだった。ニッケ紙は和紙にニッケ(肉桂)の香りがする砂糖を塗って乾かした物で、それを少しずつ切って口に入れ甘みと香りを味わい、味が無くなったら紙をそのまま吐き出すのだ。当時はむき出しのニッケ紙を駄菓子屋の店頭で誰もが触ることが出来るよう無造作に置いて販売していたので「不衛生」ということで私には許可されなかったのだろう。おまけにニッケ紙は鮮やかな赤や緑に着色されていて不衛生どころか、とても体に悪そうな着色料をふんだんに使った菓子だった。当時の私はそんな事は頓着せず、もちろん忌避もせず、他の菓子類に比べてお手頃価格であったということもあってお目当ての買い物を済ませ余ったお金で一枚買うのが常だった。

さてもう一つ駄菓子屋でニッケの味がする物に、5センチ程の小枝を10本くらい束ねた物があった。その小枝を噛んでピリ辛のニッケの香りを楽しむのだ。その小枝は肉桂の根であり、薬用にする肉桂の不要な細根の部分の部分を駄菓子として売っていたのだそうで「シバニッケイ」というらしい。ニッケ紙よりさらに安い根を爪楊枝のように噛みながら香りを楽しむといえれば格好良いのだが、私にはお小遣いが底を突いたときに買うものだったので、今思えば少々わびしいものだった。この他にもニッケ玉(あめ玉)やニッケ水(ニッキ水)など私には駄菓子屋といえばやっぱりニッケの香りという思いが強いのだ。

少子化の影響で町の駄菓子屋は減っているが、絶滅はしていない。最近ではショッピングモールの一角に昔よりやや上品な駄菓子屋があったりする。店には子供たちに混じって懐かしさに惹かれた私のようなオジサンも時々見かける。たまに店を覗いてみることもあるが残念ながら「ニッケ紙」や「シバニッケイ」は発見できずもはや絶滅したようだ。

(編集委員長：吉賀 攝)

## あ と が き

平成24年5月30日、里帰りの長女に待ちに待った初孫が誕生した。仕事を抜け出し、会いに行った。すやすや眠っていたが、なんとも可愛い。ほっぺを押さえるとゴムまりのようだった。目に入れても痛くないというが、子供が産まれた時とはまた別の感じでもあった。とにかく、元気で生まれたことが一番の喜びであった。松岡先生に感謝、感謝。携帯電話で写真と動画を撮り、また仕事に戻った。その日一日、いい気分で仕事をこなした。翌日からは、ビデオカメラ(この日のために購入した世界初の「空間光学手ブレ補正」を搭載したソニーのHDR-PJ760V)とデジタル一眼カメラを持参して撮りまくった。抱っこもしたが、首が据わっていないためか、暫く抱っこしていると余計な力が入っていたのか、久しぶりに肩こりを感じた。

1週間で退院し、自宅に戻ってきた。それからは、眠っているか、泣いているかが大部分であったが、夢を見たのか時にニコッとすることがあり、単純なものでその瞬間を見ただけで幸せな気分になった。一日ごとに表情や手足の動きに変化があり、最高の笑顔をカメラでとらえた時の気分は何とも言えないものがあり、TVや写真で繰り返し眺めている。

ある日、本屋で書棚を眺めていると、「子育てアドバイス、ようこそ初孫の巻、孫が幸せに育つために、祖父母だからできること(1万年堂出版)」という本の見出しが目に入ったため買って帰り、家内にも見せた。12項目に分かれていたが、「ここが一番大事よね」と家内が言ったのが、「しつけよりも、勉強よりも、大切なこと～それは、自己肯定感です」の部分であった。(以下引用)心の成長の一番の土台になるのが自己肯定感です。自己肯定感とは、「自分は生きている価値がある」、「私は大切な存在」、「必要とされている」という気持ちをいい、この気持ちの根っこが築かれるのが0歳から3歳ぐらいです。この土台があって、次に身につけていくのがしつけや生活習慣(朝起きて夜寝る、トイレに行く、服を着替える、自分と他人の物の区別がつく、順番を守れるなど)です。これがだいたい3歳から6歳です。これを土台にして初めて可能になるのが勉強です。これが6歳ぐらいからです。ですから、小学校が6歳から始まるのは、とても合理的なことなのです。こういったことから、しつけや勉強が身につくのも、自己肯定感という土台がしっかり育っていることが前提になります。

他にも「甘えさせると甘やかすは違います」、「抱っこできるのは今だけ～抱きぐせなんて気にしない」、「たとえ時間がかかっても子供にやらせてみましょう～無言の行とは」など、なるほどという内容が書いてあった。

最後までよく読んで、嫌われないジージになろうと思った。

(編集副委員長：田代 幹雄)

## あ と が き

先日、酒席で昔懐かしい食べ物の「ニナ」が話題になった。ニナ(蜷：地域によっては「ニイナ」とはせいぜい12~3センチほどの小さな巻き貝のことである。昔は近所の磯でいくらでも獲れた。私の子供の頃は、別府湾の上人ヶ浜にある磯場でニナをカゴいっぱい獲ってきて地獄蒸しにして食べていた。蒸したニナの身をまち針で上手に引っ張り出して味付けせずに食べるのだ。当時としては自分自身で手に入れることが出来る手軽な子供のおやつだった。

ところで、その話をすると知人の一人が怪訝な顔をする。ニナは五円玉を使って食べるのが普通だというのだ。彼が言うには、貝の先端部分を五円玉の穴に入れて折って、それを吸い出して食べるのだそうだ。私の記憶では当時食べていたニナは先端部分が五円玉に入るほど鋭角に細くなく、むしろ鈍角なのだ。

少し調べてみると謎が解けた。ニナとは巻き貝の総称で地方によって「ニイナ」「ニーナ」「シッタカ(尻高)」「バイ貝」という呼び名があり、それも地域によって貝の種類が少し違うようなのだ。私が子供の時に食べていたのはバテイラ(馬蹄螺)という種類であった。一方、五円玉の穴に入れて先を折って食べる貝はウミニナ(海蜷)という種類で、地方によっては「ホウジャ」「ホウジョウミナ」と呼ぶそうだ。こちらの方は環境変化に弱く準絶滅危惧種になっているらしい。最近でも時々地元の魚屋の店先に並ぶ事があるが、懐かしの食材という位置づけのようだ。

あまりおやつがなかった昔はニナをザルいっぱい蒸して先を争うように食べていた。そういうとき祖母から「食べ過ぎると鼻血や火ぶくれが出来るとよく注意されていたが、その当時は全く気に止めることもなかった。しかし、特に春先などにアワビなどの内臓を食べると、餌として摂取した物質が変化したピロフェオホルバイド(pyropheophorbide a)などが原因の光線過敏症を惹起するそうで、毒性は弱いもののサザエなどでも起こりうるとされている。

祖母の経験的知見による「注意喚起」は案外的外れではなかったのかもしれない。

(編集委員長：吉賀 攝)



## あ と が き

小生，1949年生まれである。1947～49年生まれは「団塊の世代」と言われ、絶頂期を過ぎた日本にとって最大の重荷となり、疎まれる存在になりつつある。「団塊の世代」の影響のほとんど無い現時点ですら、日本はすでに莫大な借金を抱え、政治家等は進む方向もまともに示せず右往左往し、ある意味瀕死の重症である。その上、2015年には全員が65歳以上になり年金を食いつぶす、2025年には75歳以上になり医療・介護費用を食いつぶすとみなされている。ひょっとしたら、食いつぶすものが既にある状況に至っている可能性もある。

「団塊の世代」は、小学生の時からすし詰め教室の上、受験戦争で鍛えられ、出世競争でも鍛えられ、高齢になって医療・介護が必要になった時までもベッドの獲得競争に追われないといけないのかというハンディを背負った損な世代だと思っていたが、他の世代の見方は全く違うようである。「団塊、嫌われぬ老後を」、「後輩犠牲の高福祉では」、「年金恵まれすぎ」、「いい思いをしてきた戦後のベビーブーム世代が、実に多くの問題を若い世代に押しつけている」、「貧しさに耐え高度成長の礎を築いたのは70代以上が中心。その花実を頂いたのが、団塊の世代だ。」といった活字が最近とみに増えている。一理あると思うが、何かおかしい。本来、子供ができれば成人するまで親が扶養し、親が年老いて自活できなくなったらその子供が親の面倒をみる、という流れが繰り返されることによって、家族が形成され、継続されている。ここが他の動物と異なる最重要部分である。親のいない子供は存在しない。子供は年老いた親の面倒をみる絶対的義務がある。何らかの事情でそれが不可能であれば、社会すなわちみんなの代理人である国が面倒をみるべきであろう。これが不可能ということであれば、人間社会、国という存在は意義がなくなる。しかし、現実を見つめていると、徐々にその状況に近づいているのではないかという不安感を感じている。少なくとも我々医師は、他の動物と異なる人間という存在を維持するためにも、高齢になっても働ける限り働き、年金をもらうよりも少しでも多くの税金を納めることを目標に元気で頑張りたいものである。

「支える世代はずっと減少していく。支える人にいかに負担をかけない老い方・死に方をするかが、重要になってくる。その意識転換をしないと社会がもたない。」

(編集副委員長：田代 幹雄)

## あ と が き

2011年11月に日本のスーパーコンピューター「京(けい)」が世界最速と認定されたが、別の意味で最近話題になったコンピューターに米国IBM社の「Watson」がある。先日NHKの番組でも紹介されていたのでご存じの方も多いと思うが、元々は米国のクイズ番組で人間と対戦するためのコンピューターシステムとして2009年より開発が始まった。人間の自然な話し言葉を聞き取り、質問の趣旨を理解して多量の情報の中から適切な回答を行う人工知能の一種である。テレビ番組では出題者の質問にあたかも人間が答えているように回答する姿が紹介され、とうとう人間のクイズチャンピオンに勝ってしまったのだ。この人工知能は機械学習という手法を用い、幼児が言葉を覚えていくように繰り返し訓練することにより適切な答えに早く到達することが出来るようになるというものだ。この技術を利用して将来はヘルプデスクやコールセンターでの顧客サービスに活用出来るというが、最も関心があるのは医療の分野だという。

コンピューターごときが人間の医者にとって代われるはずがないと思いたいが、莫大な量の知識と経験を積みればその処理能力を駆使して初期診断に応用する日もあまり遠くないような気がする。なにより彼(?)は経験を積むほど正答率が上がるし、賃上げ要求もせず黙って働く。おまけに全く同じ能力を持つコピーを作るのも容易だ。今は表向き複雑な疾患の診断や治療へのアドバイスに利用するという事になっているけれど、医師が行う行為全ては無理としても、看護師や研修医が行う程度の外来の問診ならすぐにでも可能だろう。将来、初診の患者が診察室に入ってきた時点ですでに問診の内容を要約し、疑われる疾患を示し、さらに診察や検査すべき内容、治療方針まで指示されるようになっている・・・。

あまり嬉しくないのだがもはやSFの世界ではない。

(編集委員長：吉賀 攝)

## あ と が き

先日の新聞にパナソニック7,800億円、ソニー5,200億円、シャープ3,800億円の赤字、グローバル・スタンダード(国際標準)に乗り切れず、といった見出しが出ていた。テレビ、携帯電話等日本独自のシステム、高機能化、高品質追求の表れであり、一定の品質と手頃な価格で攻勢をかける韓国に負け続けている。新幹線や農産物(例えばイチゴは韓国産の3倍の価格)も然り。日本はあらゆる面で高度な技術力を市場戦略の欠如のためうまく生かせず、ガラパゴス化の道を歩んでいる。日本の行く末は大丈夫か?というような内容であった。

しかし、ただ単にグローバル化することが良いことであろうか。途上国向けの製品であれば、低価格を追求すべきだろうが、いずれは高機能・高品質の製品を求める時期がやってくるはずだ。

ソニーの製品は割高だが他のメーカーにない面白い機能を持ち、デザインも品質も良く、学生時代から購入し始めた。その後も、パソコン、ブルーレイレコーダー、ICレコーダー、ウォークマン、PS3等ほとんどソニー製品である。ある時期から「ソニータイマー」という言葉が流行り、今も声高に言われているが、これはソニー嫌いの人のやっかみかと思っていた。実際、購入した製品で初期不良は一度もなく、5年以内に故障した製品も経験していない。

最近の問題は、すぐにも買いたいワクワクする面白みのある新製品が出なくなってきたことである。これは、社長が交代してハードからソフトに重点を置き過ぎ、エンターテインメント中心の企業に変質した時期から始まったようである。

世界のソニーのグローバル経営はもともと「グローバル・ローカライゼーション」であったが、「ローカライゼーション」の部分がいつも簡単に忘れ去られ、優秀な面白い人材を失ってしまったことによると言ってもよいようだ。独自のものを持たずして、グローバル化、グローバル化と叫んでも誰も興味を持ってくれないということだろうか。何か大切なものが失われてしまい、人も物も非常に軽薄になったようである。これは、ソニーだけではなく日本社会全体に当てはまるようにも思われる。われわれも、診療報酬、保険審査等の問題は経営面では極めて重要なことだが、医療制度をどうするかという面にもっと関心を持ち、力を注ぐべきだと感じている。

アップルのiMac, iPhone, iPod touch, iPadには常に関心を持ちながら、未だに購入していない。もっと面白いソニー製品が出ればそちらを買おうと思っていたからである。特に、iPadに勝るSony Tabletの登場を待ちに待った。しかし、2011年9月11日に満を持して販売開始となったSony TabletはiPadにはとても勝ち目のないものだった。ガックリ来た。それでもiPadを買わずに待っていた。2012年3月16日、iPadの3世代目が発売された。その内容を見ると驚くべき解像度(2048×1536)に加えて、弱点だったカメラの解像度も改善されているではないか。画像や動画を観るには最適ではないか、欲しいと思った。実物を見たが、確かに美しかった。しかし、待てよ、今度社長が50代の平井氏に代わったではないか、もう一度だけ待とう、秋にはWindows8のTabletも出るではないか、その時一番遊べるものを買おうと悩んでいる次第。こんな悩みは、仕事上の悩みに比べたら、楽しい限りである。いつの日か、発作的に3製品とも買っているかもしれない。アップルも一時倒産の危機に見舞われたことがあるが見事に立ち直った。ソニーの復活はいつのことかわからないが、日本の復活でもあり、そうなることを強く願っている。

(編集副委員長：田代 幹雄)

## あ と が き

今年は全国的に桜の開花が遅れているようだ。桜といえば一斉に咲いてすぐにハラハラと散るその姿から、日本人の精神の象徴として潔さや諸行無常の思いにも通じるなじみの深い花である。しかし花より団子も捨てがたい俗人の私には桜餅も忘れるわけにはいかない。調べてみると桜餅には長命寺（江戸風）と道明寺（上方風）の二つのスタイルがあり九州地方では後者のようである。いずれも最近ではほぼ一年中食べることが出来るが、やはり桜餅は桜の頃が一番美味しい。

ところで、桜餅は包まれている葉ごと食べるのが私の流儀だが、そういう食べ方をすると驚かれる事がある。でも桜餅は塩漬けにした桜の若葉で包まれており、一緒に食べないと葉のわずかな塩味と独特の芳香を楽しむことが出来ないと思うのだ。その独特な芳香はクマリンという物質で、生の葉に含まれるクマル酸配糖体が葉を塩漬けにすることで変化して生じるそうだ。さて、クマリンといえばその誘導体のワルファリンは医療の現場ではかなりポピュラーな薬物である。特に心房細動の血栓塞栓症の予防には欠かせないが、相互作用のため併用禁忌や併用注意の薬物も多く、なかなかやっかいな薬物でもある。そのため昔は循環器内科でキニジン、ジギタリス、ワルファリンを上手に使いこなせば一人前と言われていた。しかし今やキニジンはとっくに引退、ジギタリスは二軍落ち寸前、さらにワルファリンも新しいスターが現れて、もしかするといずれ二軍落ちになるかもしれない状況である。

プロ野球の世界では期待の大型新人の出現で、まだ実力のある現役選手がしだいに光を失うことがある。逆に大型新人が期待されたほどの活躍をせず、いつの間にか消えてしまうこともある。このような話は野球の世界だけではなく新薬の世界でも同様だ。ワルファリンを凌駕するかもしれない期待の大型新人（ダビガトランやエドキサバンなど）も期待が大きいだけにどれほど活躍できるか楽しみだが、この系統の薬は次々に新薬が現れそうな状況なのでどれが真のスタープレイヤーとして生き残れるかは未知数だ。ここでもやはり諸行無常である。

(編集委員長：吉賀 攝)